

婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(5)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

六、 横浜 一八七二年二月二十六日

故国の愛する幼い孫たちへ

ママとパパがジョージアに行つて留守だということ
とで今日は私が家族の一人として長い手紙を書きま
しょうね。

私はあなた達がそんなにお手伝いのできる子ども
になったことを聞いてとても喜んでいきます。そし
て、子どもたちの誰もが欲しがらうようなキャンディ
や小さなものなどを買わないで貯金箱にお小遣いを
ためてくれていると聞いてほんとに嬉しい。今、私
たちは大きな家を建てる準備をしています。それに
はとても多くのお金がかかるのです。そして部屋の
内部をよく整えるのには又もつとお金が必要です。
私は考えるのですが、もしあなた達やアメリカの子
ども達みんなが毎日ここにやつて来る日本の子ども
達を見ることができたら、あなた達はきつとこの子
ども達が好きになるでしょうね。そして、この子ど
も達のためにすてきな建物や教室を建ててあげるた

めに何か手伝いたいと思うでしょう。この子ども達
はハンサムではないし、とても変わって見えます
が、おとなしくて素直で、本当に熱心に勉強するの
です。ですから世話をするにも勉強させるのにも手
がかからないのです。

さて、今日の手紙は日本のお正月について私の見
たことをお話ししましょうね。ここのお正月はアメ
リカとは時期が同じではありません。どうしてかと
不思議に思うでしょうね。でも考えてみてください
い。この国は何百年の間、国を閉ざしていたので世
界の他の国で何が起きているのかわらないで過ご
してきたのです。ですから人々は何も知らないし、
他の国の人々が何をしているのかわろうともしない
できたのです。いまから数年まえに外国人が日本に
来るようになったとき、この国の人々は何世紀もの
間これまでやってきたと同じようなことをずっと
やっていて他の国とは随分違っているということが
わかったのです。すべての先進国が年とともに変化

し進歩していった間、日本はまるで眠ったように昔
のままでした。これが日本のお正月が私たちの国と
は時期的に違っているという理由の一つです。でも
この国はまもなく大きく変わっていくだろうと私は
思います。日本人は今や目覚め、世界の国々と同じよ
うになることを望むようになってきたのですから。

さて、お正月のことですが、日本のお正月は毎
年、二月にやってきました。でも、その日は月の満ち
ひきよってきめられ、少しづつ違うのです。お正
月を祝うことはとても大切な行事なのでたっぶり一
週間はかかります。人々は贈物をあげたりお互いに
家を訪問したりします。これは私たちがアメリカで
やっているのと同じなので、ある人はこの習慣が日
本から始まったと思っています。何百年もまえに貿
易に来ていたオランダ人がその習慣を持ち返り、オ
ランダからアメリカに渡っていったと思っっているの
です。これがどれくらい本当かどうか私にはわかり
ませんが私たちが長い間やってきた習慣をこの国の

人々が守り続けているのをみるのは少し不思議な気がします。でもその習慣をみることは私にとって大変楽しいことだし自然な行事なのだと思いますよ。

ここでは家がとても狭いので人々は家のなかで何かしているのと同じくらい外の路地でいろいろな事をやって生活をしています。そしてお正月に町を歩くとすべてが華やかで生き生きして見えます。男の人も女の人も誰もが一番よい着物を着ています。そして実際のところ、貧しい人たちは普通この時期をのぞいては新しいものを買うことができないのでお正月に新しいものを揃えるのです。お正月の一週間は殆ど仕事はしません。でもいろいろな遊びや楽しいことが行われます。遊びの主なもののは女の子は人形あそび、男の子は凧あげで羽根つきは誰でもやります。私は誰でもと言いましたが、これらの玩具や遊びは男の人だろが女の人だろが大人がまるで子どものように嬉しがって遊んでいます。町の通りはこうした遊びをする人々で一杯で、みんながそ

れぞれのもので遊んだり小さな子どもたちがよく遊べるように手伝ったりしています。

人々があげている凧は本当に面白いものです。みな風変わった形をしています。なかには人や動物の大きな頭のようなものもあり、ほかには、牛や鳥、なかでも皆がとても気に入っているようにみえるのは悪魔や悪霊をかたどった凧です。それがどんな風変わりで奇妙に見えるか、それらの凧が天高く空に舞いあがっているときにまるで本物のように見えるかをあなたたちにわかって貰うのは難しいことでしょうね。これらの多くの凧には一風変わった装置がついていて、それに風が当たるとやさしい音楽のような音をたてるのです。たくさんの凧がいっせいに空にあがって高い空の雲にむかって音楽を奏でているのを聞くのは奇妙ですが本当に面白いものです。私たちの小さな子どもたちにも幾つかの凧を買ってやりました。子どもたちはその凧をあげて大喜びしています。

それから日本の人形について風変わりな慣習ですが、これは私たちが想像できないほど奇妙なものです。それらの人形はまるで本当の赤ん坊や子どものように見えます。私が街を歩いていてこの人形を抱いている人に会うと本当の赤ん坊かしらとだまされてしまう位です。お正月やその他のときに人形遊び



▶ 人形で遊ぶ日本の女性

をする以外に「雛祭り」と呼ばれる行事が四月に二日間あります。(旧暦での四月)この日はすべての女の子たちや大人の女の人たちまでがとも楽しいときを過ごすのです。この人たちはお人形を抱いて外を歩いたり、人の家を訪問したり人形のために新しい着物を買って着せたりします。その様子はまるで人形が生きている子どもであるかのように大切に可愛がるのです。

あなたたちは大人の女の人の人形遊びをするなんておかしいと思うかもしれませんが、でも日本では女の人が仕事をもって働くよう教育されていないし、もっと有意義に自分たちの時間を使うように教られていないのです。この国には女の子たちのための学校がないのです。ですから女の子たちは自分たちの精神を高めより充実させるよう学ぶことなく、また自分たちの時間を楽しく有意義に過ごす方法を教えられずに大人になってしまふのです。可哀そうに日本の女性たちは無目的に時間を過ごして、

人形で遊ぶ事はこの人たちにできるせめてもの無害な楽しみなのではないかと私は思います。

お正月の行事のなかでもう一つ変わっているのは家々の飾り付けの仕方です。どの家の前にも低い竹の飾り物が置かれます。竹の葉は小さくて美しく明るい緑色をしています。それが風に吹かれ愛らしく波うつているさまは街ゆく人々の目に薄暗く狭苦しい家々をととも明るい快活なものに見せてくれます。それから家々の玄関の軒先にわらで作った長いふさ飾りをつりさげます。それもまた風が吹くたびにさらさらとゆれるのは奇妙ですが素敵です。もう一つの飾り物はとても奇妙なもので日本人の迷信好きな性格の一端をあらわしていると思います。これについてお話ししましょうね。

人々は自分の家の玄関あたりに（どの家も正面の側は全部開けていて夜や嵐などにスライド式のドアで閉めるようになっています）炊いたご飯を山の形かピラミッド型に大きく積みあげます。そして、その

てっぺんに幾ほんかの美しいわらを置き、その上に苦みのあるみかんをのせ、次にカニ（エビのまちがえではないかと思われる）を、そして一番上に干した魚の皮を置きます。

それにはこんな意味があるのです。ご飯の山は大海原の彼方にあると人々が考えている。『極楽浄土』、つまり人が死んだときに行きたいと願っている永遠の幸せの国をあらわしています。わらは悪霊から身を守るため、みかんは子孫が代々栄えることを意味しています。これによって人々は自分たちの神々に自分たちや子どもたち、子孫までが極楽浄土に行けるよう、また、みんなが生きている間も悪霊から身を守って貰えるようお願いするのです。カニは年をとって体を折り曲げて這って歩かなければならなくなるまで長生きができるようにという願いをしめています。そして魚の皮は人々が贈物や挨拶をするとき好意のしるしとしていつも使うのです。

このように神々への尊敬と好意をあらわすことに

よって神々は人々の願いをかなえてくださると考えているのです。

こういう習慣はいかに人々の心が闇のなかで閉ざされてきたか、そして死後の未来に自分たちが幸せになることを追い求めてきたかを示しています。みんなは私たちの神の素晴らしい贈物について知らないのです。イエス・キリストをとおしての永遠の命ということも知らないのです。

でも今日の手紙はあまり長くなりすぎたのでこのくらいで終わることにしましょうね。おばあちゃんのお願いはあなたたちが毎日私のために祈っていてくれるという事でそれを聞くことが何より嬉しいことです。それから神がこの学校を多くの人々が来て真理を学ぶことのできる場にして下さるように、また人々がおろかな慣習を捨てるように祈って下さい。神はもうすでに私たちのお祈りに答えて下さっているのです。なぜなら私たちがここでこんなに幸せなホームを持つことができ、こんなに多くの人々

とともに神を賛美することができているのですから。

いつも、あなた達を愛しているおばあちゃんより。

*

七、 横浜 一八七二年四月十八日

愛するキティーへ

私たちの子どものなかでノナと呼んでいる小さな女の子のお話をしましょうね。ノナというのはこの子の本当の名前ではないのです。この子のお父さんは外国から来た人でお金は沢山もっているのですが、キリスト教の国から横浜にやってきた多くの良くない人たちと同じように悪い人です。そしてお酒ばかり飲んでいて何もしようとしません。でもお酒を飲んでいないときには自分の小さな娘を可愛がっているようですし、娘の面倒を見てくれている人たちにお金を沢山あげたりしています。

この子のお母さんというのも異教徒の悪い女でノ

ナがまだ三歳にもならないときに家を出ていったのです。なんてひどい母親でしょう。そこで、この子は頼る人もなくほっておかれ、一年半の間とてもひどい状態だったのです。気の毒なことはこの子に親切にしてくれる知りあいが一人もなかったことです。最も可哀そうだったのは、この子と一緒にいた人の不注意から身体をひどく痛めつけられて片方の足を怪我し、ひとりで歩くことが出来なかったことです。手厚く治療すれば少しは良くなるかもしれませんが、私たちはそう願っているのですが今は他の子ども達と走ったりスキップしたり跳ねたりすることが出来ないのです。

さて、この小さな女の子は五か月ばかり前に私たちのホームにやってきました。そのとき、この子は英語はひと言もしゃべれず理解することもできませんでした。そして神様のことを聞いたこともなく歌うというようなことも出来ませんでした。私はあなたたちに以前に書いたことがあると思いますが日本

人は歌うということをしらないのです。この人たちが歌を聞いたのはクリスチャンの人々がここに来てからではないでしょうか。私たちが讚美歌を歌うのをノナが初めて聞いたときの驚きや興味は大変なもので、それを見る私たちのほうが面白くて驚いたものです。私はじきに彼女が上手に歌を歌うようになるだろうということがわかりました。この子はとても気難しくて最初は教えるのが大変でしたが神のたすけによってまもなく私たちの言うことをすなおに聞いて従うようになりました。

今では朝早く食堂においてきて他の子どもたちが来るのを座って待って朝食をとるようになりました。そんなところをあなた達に見せてあげたいと思います。ノナは早起きでいつも一番さきに下の部屋においてきます。そして自分の小さな椅子に座り、とても楽しみに次から次へと讚美歌を歌うのです。

“Jesus loves me” 註(1) “There is a happy land” 註(2) 等々。

それから朝食が終わって朝の聖書の時間になるとノナは私のそばの座布団に座りたがり、私と同じ椅子にひざまずいて私たちの礼拝の終わりに一緒に「主の祈り」を口ずさみます。私がお祈りをしているとき、この子が小さな手で私の手をますぐったり私の頬にそっと手をあてたりするのを感じるときそれは私に大きな感動を呼びおこします。

この小さくて、お利口さんで、愛くるしい女の子は五か月前までは可哀そうにみじめな異教徒たちの間をたらいまわしにされたあげく見捨てられた浮浪児だったのです。

“私の可愛い小さなキティちゃん”あなたもこの子を可愛いと思うでしょう。この子は今、こんな楽しいホームと一緒に暮らせてイエスさまの愛について教えて貰っているのです。本当に嬉しいことではありませんか。

今日はここまでね。 さようなら。

おばあちゃんより。



今回、紹介するのは一八七二（明治五）年二月と四月にミセス・ピアソンが米国の孫に書いた二通の手紙である。二月の手紙は日本のお正月について、人々の過ごしかた、飾りつけ、子どもの遊びなど、西洋人の目から見たものを生き生きと描いている。当時の正月は旧暦で二月に行っていたようで雛祭も四月と記されている。今日の飾りつけとは多少違っていたようであるが、日本人が

毎年、何の不思議も感じずに行ってきたお正月の慣習を西洋の人々がいかに奇妙で珍しいものとみたかがこの手紙から推察できる。そして、私たちの気づいてないところに不思議さや美しさ、面白さを感じとっていたかがわかる。例えば人々のあげている風変わりな形をした様々な凧が天高く空に舞い上がり、雲にむかって優しい音楽のような音をたてる装置の面白さとか、家々の玄関の軒先に藁で作ったしめ縄の房飾りが風にさらさらと揺れるさま等、迷信には批判しながらも日本の行事にみる不思議さに魅せられていることがよみとられる。

ところで、当時の日本は今や鎖国から開国への大きな変動期にあり、人々は眠りから目覚め始めたときであった。こうした時代のなかで余りにも遅れをとっていたのが日本の女子教育である。女子に学問は無益とされてきた世間一般の考えのなかで女子教育こそ緊急の仕事として着手したのがこれらの婦人宣教師たちであった。明治三年に創立されたフェリス女学校を先駆として翌年ミセス・プラインたちの創立した横浜共立学園など、女子教

育機関の最初の開拓は多くが米国婦人宣教師の貢献によったのである。

次の手紙は混血児ノナの養育について書かれたものである。当時の日本はとりわけ混血児を忌み嫌う風潮があり、まして、ノナのように片足の不自由な子は誰からも相手にされないのが実情であった。こうしたなかでまるで本当のわが子か孫のように「私の可愛いキティーちゃん」とは何と心あたたかい呼びかたであろう。この時代に人種や国境を越え、これらの幼児たちを愛し養育し、教育したこの婦人宣教師たちのことは保育の歴史のうえでは是非とも書き留めておかねばと私は思う。

(国立音楽大学)

註(1) Jesus love me (主われを愛す、主は強ければ) 讚美歌

四六一番

(2) There is a happy land (あまつみくにはいとたのし

讚美歌 四九〇番